

JOHAニューズレター

第37号

日本オーラル・ヒストリー学会第17回大会 (JOHA17) 報告特集

2019年9月7日(土)、8日(日)の2日間、日本オーラル・ヒストリー学会第17回大会 (JOHA17) が、横浜市立大学金沢八景キャンパスにおいて開催されました。横浜のまちを歩くプレ企画で幕を開けた今大会は、自由報告部会4つ、映画上映会および研究実践交流会、シンポジウムがそれぞれ開かれ、活発な討議が繰り広げられました。

今回のニューズレターでは、会員みなさまに、このJOHA17のご報告をするとともに、3月末締切の学会誌16号の原稿募集についてお知らせします。また、第18回大会の日程は2020年9月12日(土)と13日(日)、会場は立命館大学朱雀キャンパスです。プログラムの詳細は未定ですが、自由報告部会も予定しています。エントリー募集などについては、改めてメーリングリストや学会HP上でお知らせいたします。

【目次】

I. 日本オーラル・ヒストリー学会

第17回大会報告・・・・・・・・・・02

1. 大会を終えて
2. 大会プレ企画「中村高寛監督、陳天璽さんと一緒にヨコハマの歴史を歩く、味わう、語る」
3. 自由報告部会1(戦争)
4. 自由報告部会2(仕事)
5. 自由報告部会3(移民)
6. 自由報告部会4(メディア)
7. 研究実践交流会(開催校企画)「作品化の手法:伝えること、伝わること、共有すること」
8. シンポジウム「<見えないもの>のオーラル・ヒストリー」

II. 総会報告・・・・・・・・・・08

2018年度事業報告・決算報告・会計監査報告、
2019年度事業報告・予算案ほか

III. 理事会報告・・・・・・・・・・13

1. 第九期第1回理事会(2019年9月7日)
2. 第九期第2回理事会(2019年12月15日)

IV. お知らせ・・・・・・・・・・19

1. オーラル・ヒストリー実践ワークショップのお知らせ
2. シンポジウムのお知らせ
3. 国際オーラル・ヒストリー学会大会
4. 『日本オーラル・ヒストリー研究』第16号原稿募集、投稿規定
5. 会員異動
6. 2019年度会費納入のお願い

.....
*ニューズレター掲載のメールアドレスは、(at)部分を@に替えて送信してください。

日本オーラル・ヒストリー学会
Japan Oral History Association (JOHA)

I. 日本オーラル・ヒストリー学会 第17回大会報告

1. 大会を終えて

JOHA 第17回大会は、2019年9月7日・8日に、横浜市立大学金沢八景キャンパスで開催されました。直前5日に京浜急行線の事故があり、8日夜半に台風15号が到来するという2大災害のわずかな隙間の2日間（プレ企画を含めると3日間）の日程で、トラブルもなく盛会のうちに開催できたことが今でも奇跡のように思えます。2日目午後のシンポジウムを無料公開したため参加者の総人数を確定する事ができないのですが、参加費を支払った86名プラス10名程度の方々にご参加いただき、連日自由活発な討論と交流が会場のあちらこちらで生まれました。

今回の実質的な運営を担ってくれたアルバイトの学部生9名は、私の授業の受講生で、オーラルヒストリーの一連のプロセスを経験した学生です。村上水軍の末裔の祖父の話や甲府の老舗果物屋の実家から見た甲府大空襲と戦後の復興についてなど、大変興味深いモノグラフを制作してくれました。ボランティアで手伝ってくれた大学院生（修士生含む）6名も、ただ手伝うだけでなく、この学会のもつ自由闊達さや研究の楽しさを印象に残してくれたようで、次世代への啓蒙活動としても有効だったのではないのでしょうか。

懇親会へは33名の方にご参加いただき、ケータリングのメイン料理やブラジル料理とDJを閉会ギリギリまで楽しんでくださった様子に、準備の大変さが報われた思いがしました。私がかつて参加した国際オーラル・ヒストリー学会の楽しい雰囲気や少しでもお届けできたと思えば、嬉しい限りです。開催校スタッフを代表して、ご協力いただいた参加者と関係のみなさまに心より御礼申し上げます。来年度の立命館大学、楽しみにしています。

（第17回大会開催校理事・滝田祥子）

JOHA16 実行委員会：

滝田祥子、橋本みゆき、坪谷美欧子、仙波梨英子、横浜市立大学大学院生、学部生

学会事務局：人見佐知子 研究活動委員会委員長：田中雅一 会計：上田貴子

1. 大会プレ企画「中村高寛監督、陳天璽さんと一緒にヨコハマの歴史を歩く、味わう、語る」

大会の開催地横浜のオーラル・ヒストリーの現場のひとつを体験していただくために、横浜港の海岸地区にある海外移住資料館から中華街まで、そして、夜の伊勢佐木町へと、それぞれの場所についての作品をつくっている中村監督と陳天璽さんとともに歩いて学ぶフィールドワークを企画した。参加者は22名。

中村監督のドキュメンタリー映画『禅と骨』は6日初日に午前にも上映会があり、また午後の研究実践交流会では前作『ヨコハマメリー』を含めて話題提供をしていただくという事もあり、彼のドキュメンタリー映画作品制作の発想の原点を現地で確認していくフィールドワークでもあった。そこに、横浜中華

街で生まれ育った早稲田大学教授の陳さん（無国籍者研究）の中華街ガイドが加わり、生活者目線と研究者目線、〈今ここ〉と〈歴史〉の軸が交錯した先に生まれるオーラル・ヒストリー作品を理解する重要な機会になった。

16時に海外移住資料館に集合したのち、滝田のガイドで常設展示をまわり、資料館でのオーラル資料の使われ方を確認した。つぎに、中村監督のガイドで山下公園に立ち寄り、作品（『禅と骨』）の最初に観客をドキュメンタリーの謎解きに誘い込むモチーフとなる「赤い靴をはいてた女の子像」を訪ねた。その後、映画の最終シーンに映し出される「平和を祈る観音像」CGの投影されたホテルニューグランドホテルタワー館の横を通りすぎ中華街に向かった。

17時には朝陽門で陳さんと合流し、中華街で華僑の人たちが生活している動線を中心に、ときおり過去の中華街の姿にも言及しつつまち歩きをした。陳さんのご実家、「華都飯店」にてディナーならびに陳さんの無国籍者研究における様々な聞き取りの事例をご紹介いただいた。

20時頃に、地下鉄を使って最後の訪問先の老舗バー「アポロ」訪問。時間が押してきたために伊勢佐木町まち歩き（『ヨコハマメリー』の舞台）はできなくなったが、16名が最後までヨコハマの過去現在未来に思いを馳せ、中村監督と陳さんとともに楽しく、学びの多い語らいの時間を過ごすことができた。

本番前の交流により、学会参加者の間の緊張感をほぐす事ができ、次の日からの研究報告や実践交流会での交流しやすい雰囲気が醸成されたと考える。こうしたイベント企画は海外で開催されるオーラル・ヒストリー学会でよく使われる手法の一つである。

（滝田祥子）

2. 自由報告部会1（戦争）

自由報告部会1では、戦争をテーマに4つの報告が行われた。

第1報告の竹原信也（奈良工業高等専門学校）「移動する女性の経験が意味すること」は、済南の日本人居留地に生まれ、女学校時代を錦州（満州）で過ごした経験をもつ女性のライフ・ヒストリーから、日本人居留地に住む人々の生活の記録を掘り起こす意欲的な試みであった。「日本人居留民」のうち、日本から入植した人々と外地で生まれ育った人々との経験の違いなどについてフロアとのやりとりがあった。

第2報告の四條知恵（日本学術振興会特別研究員PD・長崎大学）「ろう者の原爆の語り」は、長崎のろう学校におけるコミュニケーションの指導方法に注目しながら、ろう者が原爆の体験を語ることの難しさについて検討することを通して、戦後日本社会の中でろう者による原爆の語り「公的な原爆の語り」とはならなかったことについて報告がなされた。それに対して質疑応答の中では、ろう者による原爆の語りに注目する研究の新規性や立場性をめぐって議論が交わされた。

第3報告の那波泰輔（一橋大学大学院）「1980年代のわだつみ会における加害者性との向き合い」は、第三次わだつみ会の規約改正（1988年）で、戦争責任の文言が追加されたことの意味や背景について、わだつみ会という組織としての対応がどのようであったのかを主軸として、わだつみ会の関係者に対する聞き取りをふまえた考察がなされた。フロアからは、聞き取りの成果は報告内容にどのように反映されているのか、規約改正後にわだつみ会はどのように戦争責任を問うことができたのかなどについて質問があった。

第4報告の福田真郷（京都大学大学院）「沖縄県の在日米軍基地における「黙認耕作」は、現在沖縄の米軍軍用地内の「黙認耕作地」で行われている耕作活動のフィールドワークを通して、そうした「黙認耕作」に関わる人びとのあいだで基地によってもたらされる「受益」がどのように捉えられているのかについて報告がなされた。それに対して質疑応答の中では、地主や耕作者、いわゆる「反戦地主」などの「黙認耕作」に関わる人びとの多様性をめぐって議論が交わされた。

（木村豊・人見佐知子）

3. 自由報告部会2（仕事）

第2分科会は、仕事をめぐるオーラル・ヒストリー／ライフストーリーを題材にした4報告によって構成された。

第1報告、中原逸郎「芸の発信：京都上七軒北野をどりの創成を中心に」では、戦後混乱期の花街においてどのようにして芸が継承されていったのかが、豊富な史料と聞き取りをもとに検討された。結論では、西洋化した観客の好みを取り入れつつ、正当文化と大衆文化が融合した「伝統芸」へと変化していった京都上七軒北野をどりの特徴が整理された。

第2報告、三浦優子「海外駐在員女性配偶者の生活の中の両義性：語りからの考察」では、夫の仕事に帯同して海外で生活する駐在員配偶者が性別役割分業をどのようにとらえているのか、3名へのライフストーリーインタビューが検討された。性別役割分業を強いられと感じたり受け入れることができたりとらえ方はそれぞれだが、社会とのつながりを模索してきた過程が描かれた。

第3報告、島田有紗「高齢者労働力化と就労当事者の経験：高齢自営漁師たちの出漁実践と語り」を事例に、高齢者がどのように働いているのか明らかにすることを通して、金銭獲得以外の労働の価値が検討された。事例は、マグロの町として知られる青森県大間町の漁師たちであり、機器のハイテク化や身体の衰えによって周縁化されつつも、高齢漁師にとっての出漁が社交の契機となっていることが示された。

第4報告、八鍬加容子「語り始めた「ホームレス」の人々：『ビッグイシュー日本版』「今月の人」誌面分析から」は、『ビッグイシュー日本版』の誌面分析であり、これまで聞き届けられてこなかったホームレスの人びとのライフストーリーが検討された。結論では、マスメディアでのホームレス報道への対抗的な物語の構築や、記憶・経験を共有するコミュニティとしての『ビッグイシュー』の歴史的意義が示された。

各報告の質疑応答では、類似した事例との比較の可能性や時代的・社会的・文化的背景との関わり、オーラル資料にメディアが与える影響などが議論され、報告者それぞれにとって、今後の研究課題が明確になったのではないだろうか。

（矢吹康夫）

4. 自由報告部会3（移民）

第三部会には日本への移民、日本からの移民に関する報告が集まり、自由報告でありながら「世代」へ

の関心など共通項の多い会であった。

第一報告の孫夢（首都大学東京）「「留学（さ）せざるを得ない」当事者のライフストーリーからみる現代中国の教育の現実」では、日本に留学せざるをえない息子と、息子を留学させざるを得ない母の2人にインタビューをし、日本留学の背景として家族の香港への移民、母の離婚と再婚、息子の就職難などの事情を読み解いた。それらは留学先「日本」とは関連が希薄な事情であった。

第二報告の山崎哲（一橋大学）「「あなたの名」を知らぬ者は生活史をどう語るか—ある中国帰国者3世への聞き取り事例から」では、「残留邦人」という言葉しか知らなかった語り手が「3世の会」に接触したことで「中国帰国者」というカテゴリーを獲得し、ファミリーヒストリーを再構築していく語り方が検討された。日本社会に溶け込み見えなくなっていく人が多いと言われる中国帰国者3世であるが、この語りからは、家族内での歴史継承の困難や中国、中国語との距離が「中国帰国者としての自己」を見えなくさせていたことが報告された。

第三報告の竹田響（京都大学）「在日コリアンの国境を越えた親族の繋がり—朝鮮半島の南北に離散して暮らす親族との「再会」に注目して—」では、在日コリアンの朝鮮半島と日本に跨る親族ネットワークがどのように形成されているかをテーマとして報告が行われた。特に親族が朝鮮民主主義人民共和区に「帰国」した経験を持つ人々を対象に聞き取りを行い、そのネットワークを詳細に分析した。結論としては一般に在日コリアンは国境を挟んで、親族が分散、分断しているように見えるが、実際は世代を越えて、（再）構築されているというものであった。

第四報告の仙波梨英子（横浜市立大学）「在日フィリピン人の第二世代のオーラル・ヒストリー：アートを通じた表現活動から考察する」では、在日フィリピン人第二世代の表現活動に注目し、彼（女）らのカテゴリー化への対抗を分析した報告であった。報告者自身も表現活動に自ら参加し、調査者-被調査者の枠組みをこえて、相互作用の中に現れる「わたし自身」を分析しようと試みた。結果として、「ハーフ」というカテゴリー内部の多様性や、相互作用による相互理解と新たな認識、自己定義、他者定義の枠組みの可能性が示された。

第三部会は全体的に移民の新しい世代の研究が多く、これまでのカテゴリーの脱構築が前提となっている報告であった。今後のさらなる研究の展開が期待されるものであった。

（佐々木てる・清水美里）

5. 自由報告部会4（メディア）

自由報告部会、第4分科会には、メディアをテーマとした研究が4本報告された。

林貴哉氏による第1報告「在外ベトナム人コミュニティにおける声の発信—米国のベトナム語メディア関係者の語りから」では、1975年のベトナム戦争終結後に米国で形成されたベトナム人コミュニティのテレビ番組制作者を対象にした調査内容が報告された。本報告では、ベトナム語で放送されるテレビ番組を制作者がどのように位置付けているのか明らかにされた。

澁谷由紀氏による第2報告「ベトナム戦争期のジャーナリスト／諜報員の語りと現在—『ファム・スアン・アン—名前のとおりに生きた男』とその関連書籍をめぐって」では、通信社ロイターや、『タイム』誌の特派員を務めた諜報員の語りを持つ今日的な意味や、当該人物が注目されていく過程が、詳細に報

告された。本報告に対しては、当該人物の来歴などについて質問がなされていた。

石井育子氏による第3報告「ラジオドラマ史にみる脚本制作の変遷についての1考察」では、ラジオドラマというコンテンツの今後について、ラジオドラマ専門の脚本家北阪昌人氏への聞き取りから考察を行った。結論として報告者はネットにおけるリスナーの要請を視野に、新たなラジオドラマ制作の試みがなされる環境が整っている点を指摘していた。本報告に対しては、調査の位置づけなどについて、質問がなされていた。

西村秀樹氏・小黒純氏共同による第4報告「社会派TVドキュメンタリーの成立過程の研究、戦争の加害と被害をめぐる『記憶の澱』の研究」では、当該番組の制作意図・過程などに関する制作ディレクターへの聞き取り調査の結果を報告し、番組制作が可能になった職場環境や本人の資質などが明らかにされた。本報告に対しては、制作に関連づけられる可能性がある女性誌の記者の位置づけや、ドキュメンタリー制作以前の史実の位置づけなどについて活発な議論が行われた。

(池上賢・倉石一郎)

6. 研究実践交流会 開催校企画研究実践交流会 「作品化の手法：伝えること、伝わること、共有すること」

ドキュメンタリー作品を作っている映画監督（中村高寛氏）から自分が集めた素材をどのように作品化しているのかというお話を伺い、参加者の作品化（論文、本、映像など）の実践についての問いを深めてもらいたというのが今回の実践交流会の目的である。43名の参加者ととも、以下の3つの問いを考えてみた。1) 伝えていくための工夫、2) 作品化した後の手応え、3) 記憶の共有の難しさと可能性。

この交流会は、今期研究活動委員会の春季シンポジウム『ビジュアルオーラルヒストリーの可能性と現在』と実践ワークショップ『作品と現地をつなぐ』（2回）の流れにつながるもので、最初に橋本委員から簡単な経緯を説明してもらった。それを受けて、中村監督のドキュメンタリー映画制作とオーラルヒストリアンの研究活動との共通点を探っていった。

中村監督の制作プロセスは著書『ヨコハマメリー』（河出書房出版社、2017年）に詳述されており、これまで日本のドキュメンタリー作家がここまで手の内を明かす著作を書いたことはなかったことを考えると特筆に値する。リサーチに2年間かけながら、＜自分の視点探し＞をしていったという。自分なりの視点が見つかって初めて、映画作品がみえてくる。また、監督は、なぜ他の誰かではない自分がその作品を撮るのか、作るのか、という＜内的必然性＞を常に考えていたという。

伝わるための工夫としては、自分の映画と全く関係のない人を対象にしたスニークプレビューをして、お酒を出して、話しやすい雰囲気の中で感想を言ってもらう事に行っているということだ。ここで大事なのは、一切自分からは話をしたり、説明や反論をしないこと。感想を全部聞き取っていき、自分の伝えなかった事がどう伝わらなかったかを検証していく。作り手と受け手の差異を埋めていく作業を徹底的に行うことを大切にしているという。

記憶を集めだけでは＜アーカイブ＞はできるかもしれないが、他者の共感をえるような＜作品＞はできない。中村監督の場合は、話を聞いていく中で、その人なりの＜物語＞が見えてきたら作品になると感じるそうだ。パッチワークの証言ではなく、一人の人の証言が、これがあったから、こうなったという、

一つの物語として完結するような見せ方を試み、そこに見える物語性が、〈共感〉につながると思っている。体験した人しか過去の出来事を語る事ができず、理解もできないとしたら、体験した人が死んでしまったら過去が消えてしまう事になる。そうならないためにも、過去を体験していない後から生まれてきた世代がどう語り継ぐ事ができるかに過去はかかっているのではないか。

文字は記憶を伝える作品化の中で、どれほど重要なのか？文字以外の手法をオーラルヒストリアンも身につけていく必要があるのかもしれない。しかし、監督のそう言った挑発に対し、会場からは、「編集が入ってしまうと、ジャーナリズムになってしまうのではないか？」「オーラルヒストリアンは、もしかしたら、そこと違うところを目指しているのではないか？」などの質問が出された。たしかに、台湾や中国では、ノーカットで発言に編集を加えないで見せるという手法のドキュメンタリーの考え方がある。監督は、「アーカイブにしても、視点や編集の作為が含まれている。カメラを回し、相手に何かを聞くかという事には、つねに解釈編集がある」ときっぱりと言い切った。

ドキュメンタリーとオーラルヒストリーは親和性が高い。監督の言葉を借りれば、それは、「重い荷物を持っている人を見過ごせなくて、代わりに持ってあげたようなもの」。そのような経験は、この報告を読んでいるみなさん、実践交流会に参加した皆さんにもあるのではないだろうか。

(滝田祥子)

7. シンポジウム「〈見えないもの〉のオーラル・ヒストリー」

幻覚や幻聴、夢、心霊現象、超常現象といった目に見えないものは、しばしば当事者たちの生に大きな影響を与える。たとえば、災害や戦争で亡くなった者が夢に現れ、遺言を残したり、自らの進むべき道に何か示唆を与えていたり、過去の夢が「虫の知らせ」であり予言・予知であったと認識していたりする。しかし、いかにそれが当事者たちにとってリアリティのあるものとして存在していても、目に見えないものは虚構であるかのように受け止められることも多い。本シンポジウムの目的は〈見えないもの〉のオーラル・ヒストリーに関連する研究報告をもとに、その意義や方法について議論することにあつた。

金菱清氏（東北学院大学）による第一報告は、〈見えないもの〉とオーラル・ヒストリーの関わり・可能性について言及することから始まり、自身の調査とその成果を辿りながら、東日本大震災後に被災者が経験した諸現象——タクシー・ドライバーの見た幽霊、亡き人への手紙、そしてそこから派生した亡き人の夢など——について説明した。トピックは多岐に及んだ一方で、生と死、生き残ったもの（生者）と死者との関係などが全体を通して論じられた。本報告では、死者に対する生者の関わり方の多様性（手紙、夢、幽霊）が示され、そこにある関係性の曖昧さとその重要性が指摘された。

北村毅氏（大阪大学）による第二報告は、あるガマに平和学習に来た生徒たちが「憑依」されるという事例をもとに、沖縄戦の死者の存在と地域社会、そして外部者（生徒）の関係について検討するものであつた。本報告では、修学旅行生の「憑依」という出来事について、ガイドなどの地元の人々の視点から解きほぐす一方、この場所が「心霊スポット」として外部から位置づけられ、「心霊体験」の語りが定型化されてもいるという社会的背景を指摘し、地域社会と外部の認識のズレを浮かび上がらせた。

企画者であり本報告の執筆者でもある根本雅也（日本学術振興会）による第三報告は、アメリカに移住した一人の原爆被爆者の幻覚（vision）を事例として、この経験の事実性、本人にとっての幻覚の意味、そして〈見えないもの〉がオーラル・ヒストリー研究にもたらす可能性について議論した。

本シンポジウムは二人のコメンテータを招いた。有菌真代氏（龍谷大学）は、ハンセン氏病患者の療養所を研究してきた経験をもとに、生者と死者の密接な関係性などを示唆した。原爆文学と沖縄文学を研究する村上陽子氏（沖縄国際大学）は、文学作品において〈見えないもの〉が一つのジャンルとして存在すること、そうしたものが生者による死者の利用ともなりうることを指摘した。

フロアからも質問が多く出され、活発な議論が展開された。また、自身の〈見えないもの〉にまつわる経験を話す方もいたことから、本テーマがこれまでに見過ごされていた経験や事象の掘り起こしにつながる可能性も垣間みえた。

なお、本シンポジウムは、台風 15 号の接近に伴い、予定時間よりも少し早く終了した。本企画のためにご尽力いただいた登壇者をはじめ多くの関係者の方々、また足元の悪い中ご参加いただいた方々に感謝申し上げます。

（研究活動委員 根本雅也）

II. 総会報告

2019 年度総会（第 16 回）

日時：2019 年 9 月 8 日（日）12：05～13：00

場所：横浜市立大学金沢八景キャンパス YCU スクエア ピオニーホール

会長挨拶、議長選出（矢吹康夫会員）の後、以下の議案が諮られた。

第 1 号議案 2018 年度事業報告

2018 年度（2018. 9. 1～2019. 8. 31）事業報告について、以下の諸点が報告され、了承された。

1. 会員数の現状

前回学会以降、2019 年 3 月末までの新規入会者は 8 名（一般 3 名、学生他 5 名）。4 月以降の入会は、16 名（一般 5 名、学生他 11 名）あった。3 年間の学会費未納による自動退会者 9 名、自己申告退会は 9 名あった。8 月 31 日現在の会員は 267 名（前回 261 名）である。これは昨年同時期と比べ 6 名の増加である。

2. 第 16 回大会（JOHA16）の実施と第 17 回大会（JOHA17）の開催

第 16 回大会は、2018 年 9 月 1～2 日の二日間にわたって東京家政大学（東京都板橋区）で開催した。自由報告は 3 つの分科会に分かれ 15 本が報告された。大会初日には、特別講演会「語り得ぬ性被害——戦時暴行による妊娠と中絶をめぐる——」、研究実践交流会「オーラル・ヒストリー／ライフストーリーの現場性を問い、一步を踏み出すために——『聞くこと』と『書くこと』を結ぶもの／隔てるもの」、大会二日目には、大会校企画テーマセッション「女性の声を聴く」、シンポジウム「食に聴く・食を書く——食の媒介者たちをめぐる歴史と社会」を開催した。開催校によると 2 日間でのべ 111 名が参加した。

第17回大会は、2019年9月初旬の二日間で開催する予定である。第17回大会では、新たな試みとして、大会時託児サービスを実施したが、申込者はいなかった。

3. シンポジウムの開催

2019年3月10日、大阪経済法科大学東京麻布台セミナーハウス（東京）において、シンポジウム「ビジュアル・オーラル・ストーリーの可能性と現在」をおこなった。オーラル・ストーリーとビジュアル表現を組み合わせた研究や活動に関わる方々を招き、写真や映像などをオーラル・ストーリーの実践に活用する意義や課題について活発な議論が展開された。

4. 実践ワークショップの開催

2019年5月26日、京都市にて、中原逸郎氏をむかえ、実践ワークショップ「現地と作品を結ぶ(2)花街の衣食住——京都・上七軒を舞台に」をおこなった。講師を含めて21名が参加した。

5. 学会誌14号の発行と15号の編集・発行

2018年9月に学会誌第14号を発行し、同月中にインターブックス社から配送した。15号の編集作業は順調に進み、例年通りの発行を予定している。

6. ニュースレターの発行

ニュースレターは第16回大会後、第17回大会の間に、35号（2019年2月12日）と36号（2019年8月7日）を発行した。広報委員2名が編集を分担した。会員メーリングリストでの配信を行った。

7. ウェブサイトの充実

ウェブサイト（<http://joha.jp/>）を学会事務局と広報委員会が管理運営している。

8. 会員相互の交流の促進

会員メーリングリストを通じた会員相互の情報発信が適宜なされている。

9. 学協会誌の電子化事業

学協会誌の電子図書館事業が2016年度に終了となったことに対して、本学会では、2017年よりJ-STAGEへ参加することとした。すでに手続きは完了し、JOHA14号までWeb上に公開されている。なお、費用などはインターブックス社と調整している。

以上

第2号議案 2018年度決算報告

2018年度（2018.4.1～2019.3.31）決算報告資料に基づき報告され、了承された。

第3号議案 2018年度会計監査報告

好井裕明監事と川又俊則監事より「会計帳簿、預貯金通帳、関係書類一切につき監査しましたところ、

正確で適切であることを認めましたので、ここに報告いたします」と報告があり、了承された。

第4号議案 2019年度事業案

2019年度(2019.9.1~2020.8.31) 事業案について、以下の諸点が報告、了承された。

1. 会員の拡大と維持

年次大会やシンポジウムなどの実施を確実にを行い、これらの情報を広報することで、本学会の周知に努め、会員数の拡大を目指す。会員の維持と会費収入確保のため、大会後、年内を目途に郵送による入金状況確認を行い、会費納入の督促を行うと同時に未納退会者を防ぐようにする。

2. 第17回(JOHA17)大会の実施と第18回大会(JOHA18)の準備

第17回大会を2019年9月7~8日の二日間にわたって横浜市立大学(横浜市金沢区)において開催する。大会プレ企画として「中村高寛監督、陳天璽さんと一緒にヨコハマの歴史を歩く、味わう、語る」をおこなう(9月6日)。自由報告は4つの分科会に分かれ、16本の報告を予定している。大会初日(9月7日)は、中村高寛監督『禅と骨』上映会、大会校企画として研究実践交流会「作品化の手法——伝えること、伝わること、共有すること」、2日目(9月8日)は、特別イベント「科研費改革の背景と動向」、シンポジウム「〈見えないもの〉のオーラル・ヒストリー」を予定。広報活動として学会HPに掲載し、学会理事を中心に広報に努めている。

来年度の第18回大会については2020年秋に立命館大学にて二日間開催予定。

3. 学会誌第16号の発行

学会誌第16号は、第9期理事会の編集委員会によって、JOHA17のシンポジウムと自由投稿をもとにして編集する方針である。また、学会誌の査読体制などの充実をはかるため、第8期にひきつづき非理事の編集委員をふくむ編集委員会によって編集する。

4. シンポジウム・ワークショップの開催

シンポジウムは2020年3月、ワークショップは2020年6月ごろ実施予定。内容は第9期の研究活動委員によって決定予定。

5. ニュースレターの発行

JOHA17後に大会報告を中心にしたニュースレター第37号を、JOHA18前に大会プログラムを中心にした第38号の発行を予定している。

6. ウェブ情報の充実と改善

学会ホームページをさらに見やすく整備するとともに、適宜更新していく。

7. 会員相互の交流促進

学会HPや会員メーリングリストの活用、ニュースレター配信を通じて、会員相互の交流を促進す

る。また、会員の出版、活動情報についても学会誌での書評等を通じて積極的に共有する。

8. 海外のオーラル・ヒストリー団体との交流

理事および関心ある会員を中心に、海外のオーラル・ヒストリー団体との交流を促進し、会員に情報提供を行う。

以上

第5号議案 2019年度予算案

2019年度（2019.4.1～2020.3.31）の予算案資料に基づき提案され、了承された。

第6号議案 理事選挙結果報告

「学会会則」第6条3項（理事の選出は年会費を払った正会員の選挙による。選挙規程に関しては、別に定める）および「理事選挙規程」に則り、2019/2021（第9期）理事を選出する選挙を実施しました。

2019年5月31日、近畿大学にて選挙管理委員会を開催し、2019/2021（第9期）理事選挙（5月13日必着）の開票作業を行いました。投票状況は以下の通りです。

郵送による投票総数：59枚

白票による無効投票：1枚

3名以内連記の有効投票総数：169票

被選挙権該当者以外への投票による無効投票：3票

選挙管理委員会は、選挙結果に基づき選出理事（上位9名）を確定しました。6月16日、選出理事を上智大学に招集し、欠席者を除く7名によって理事の選定を行いました。その結果、2019/2021（第9期）理事会構成案が総会で提案されます。以下に、関連規定を掲げます。

参考：日本オーラル・ヒストリー学会理事選挙規程（抄）

1. 理事会の構成

日本オーラル・ヒストリー学会の理事会は、会員による投票で選出される8名と、投票によって選出された理事による推薦選出者7名以内の15名以内で構成され、選挙年度の総会において承認を得るものとする。

5. 選挙管理委員会

選挙管理委員会は事務局長および事務局長が指名する正会員2名で構成される。

6. 開票および当選者の招集

選挙管理委員会は投票締切期日を待って開票作業を行い、開票の結果上位8名の当選者を招集する。なお、最下位得票者に同票者がいる場合の扱いは、以下の通りとする。

6. 1. 同票者を加えた当選者が8名を超えて15名以内の場合は、そのまま選出する。その数が理事定数の15名を上回る場合は、最下位得票者の同票者を抽選により順位付けし、上位から定数までを選出

する。辞退者が出る場合には、順位により繰り上げ当選者を確定する。

7. 投票による選出理事の役割

投票によって当選した 8 名の次期理事は、次期会長候補者を互選し、また残り 7 名以内の理事候補を投票結果を参考にしながら、選出する。

以上

日本オーラル・ヒストリー学会 2019/2021（第 9 期）選挙管理委員会(五十音順)
佐藤量・西井麻里奈・人見佐知子

第 7 号議案 第 9 期理事会の承認

理事選挙結果に基づき、選出理事（出席 7 名）を 6 月 16 日（上智大学）に招集し、以下のとおり、理事会のメンバーを選出しました（五十音順）。ご承認をお願いします。

赤嶺淳、石川良子、上田貴子、小林多寿子、今野日出晴、佐野直子、塚田守、根本雅也、野入直美、能川泰治、橋本みゆき、安岡健一、矢吹康夫、山本恵里子（以上 14 名）

以下に関連規定を掲げます。

参考：日本オーラル・ヒストリー学会理事選挙規程（抄）

8. 理事会、事務局の構成

投票と推薦選出によって決まった 15 名以内の理事によって、事務局と次期理事会が構成される。

9. 選挙年度の総会において、次期会長と理事が決定される。

理事会構成員の互選の結果、以下の理事会構成案を提案します。

2019/2021（第 9 期）JOHA 理事会

会長：赤嶺淳

事務局長：矢吹康夫

会計：上田貴子

編集委員長：石川良子

編集委員：今野日出晴、佐野直子、塚田守、根本雅也

研究活動委員長：橋本みゆき

研究活動委員：小林多寿子、能川泰治、安岡健一、山本恵里子

広報委員長：野入直美

監事：岩崎美智子、倉石一郎

（第 8 期事務局長 人見佐知子）

Ⅲ. 理事会報告

第8期 第9期 合同理事会 議事録

日時：2019年9月7日（土）10:00～12:00

場所：横浜市立大学 YCU スクエア 大学院演習室3

出席：蘭信三、人見佐知子、田中雅一、佐々木てる、佐藤量、山田富秋（以上、第8期理事）、滝田祥子（大会開催校理事）、石川良子、上田貴子、橋本みゆき、矢吹康夫（以上、第8期、第9期理事）、赤嶺淳、小林多寿子、塚田守、能川泰治、山本恵里子（以上、第9期理事）

欠席：大門正克、北村毅、倉石一郎、中村英代（以上、第8期理事）、根本雅也（第8期、第9期理事）、安岡健一、今野日出晴、佐野直子、野入直美（以上、第9期理事）

議事録作成：矢吹康夫

第8期第7回 JOHA 理事会 議事録

1. 前回議事録・議事録記載者確認

- ・確認した。

2. 会長から（蘭）

今大会の開催。プレ企画も含めて充実した内容。事故によるダイヤ乱れや台風接近もあるが無事に終了することを祈っている。今大会終了から第9期理事会に移行。

3. 編集委員会報告

○第15号について（佐々木）

- ・インターブックスで最終校正済み。投稿論文5、研究ノート1、聞き書き1
- ・月末には発送の予定

○インターブックスの業務内容確認（上田）

・会誌の印刷費は定額ではなく、毎年見積もりを出す。ページ数ごとの見積額はおよそすでに出ている

- ・奥付の発行所、発行者を変更。学会名で Amazon で販売できるようになったため
- ・会誌の買い取り・販売について：300部学会買い取り、30部はインターブックスが Amazon 販売用に買い取り。会員への一斉発送作業はインターブックス、残りを学会で保管

→過去年度の Amazon 等での売り上げ実績は請求する

→バックナンバーをインターブックスが買い取るのかどうかは再確認

- ・バックナンバーの保管について：個別の入金・発送は学会で行う。例年20部程度個別発送。会計が保管するのが合理的

→その他、直接の購入希望と丸善の販売で例年15部程度

- ・バックナンバーを学会時に割り引き販売することも検討

・Jstageについては継続審議

4. 研究活動委員会報告

○開催校より（滝田）

・プレ企画 22 名参加、現在映画上映中

5. 広報委員会報告

○ニュースレター36号発行

○次号 37 号大会報告：各企画者、司会者に報告執筆を大会後にあらためて次期広報委員から依頼

6. 会計報告

○2018 決算、2019 予算案を総会で報告予定

・インターブックスとの作業分担見直しにともない、予算通りに動かないかもしれない

・会誌バックナンバーは一定数は会計が保管・発送。すべては無理なので残りを事務局または編集委員会で保管

→次期理事会で協議

7. 事務局報告

○会員異動

・新入会員 2 名

・退会者 1 名

・保留 2 名→名誉会員については後述

○賛助会員についての内規案について

・正会員は入金確認後、会誌発送。賛助会員の団体・機関の会計年度によっては入金が年度末等になる可能性がある

→具体的な事案が発生してから個別に対応する

・主催行事に会員価格で参加できるかどうか

→滞納会員も会員価格で参加できている

→「賛助会員の場合は〇名までは主催行儀に会員価格で参加可」といった規程を作るかどうかなど、次期理事会で継続審議

○名簿について

・会員から会員名簿の閲覧ができないのか問い合わせがあった

・入会申込書に「会員名簿への掲載の可否」をチェックする項目があるが、会員間で共有するための名簿は作成してこなかった

・発送作業等のための名簿はあるが、関心領域などは未記載

→研究活動委員会から司会者を、編集委員会から査読者を依頼する際には名簿を参照できると便利

→次期理事会で継続審議

8. その他

○2020 年度大会開催校：立命館大学

- ・実行委員長：西成彦、開催校理事は西または佐藤、日程未定

○名誉会員について

- ・手続き案：理事会の推薦の後、本人に意志確認する
 - ・資格案：たとえば会長経験者、学会発起人など。70 歳以上とする
 - ・会費未納の退会者の扱い：退会後に名誉会員とすることの可否。名誉会員に推薦後に未納分をどうするか
 - ・名誉会員になった場合の会費、会誌投稿資格、主催行事参加費など
- 現理事会で名誉会員制度を創設することを決定
→詳細は他学会の事例などを参照しつつ、次期理事会で継続審議

第 9 期第 1 回 JOHA 理事会 議事録

1. 新会長の挨拶（赤嶺）

出張で不在中に会長に互選された形だが、会長経験者も理事にいるので頼もしい。2 年間よろしく申し上げます。

2. 新理事の紹介および委員会の確認

会長：赤嶺淳

事務局長：矢吹康夫

会計：上田貴子

編集委員長：石川良子

編集委員：今野日出晴、佐野直子、塚田守、根本雅也

研究活動委員長：橋本みゆき

研究活動委員：小林多寿子、能川泰治、安岡健一、山本恵里子

広報委員長：野入直美

監事：岩崎美智子、倉石一郎

3. 各委員会より

○編集委員会

- ・非理事委員を 1 名（以上）補充する予定

○研究活動委員会

- ・特になし

○広報委員会

- ・ホームページ管理のアルバイトを探す

○会計

- ・理事会交通費について確認
- 開催校理事代行の場合も同条件とすることを承認
- ・学会側で個別に発送する会誌は送料を徴収する
 - ・会誌バックナンバーは、個別発送分を会計が保管、残りを編集委員長が保管することを確認
- 事務局
- ・名簿の整備をするならば、あらためてアルバイトを雇用することも検討

以上

第9期 第2回 JOHA 理事会 議事録

日時：2019年12月15日（日）13：00～16：30

場所：一橋大学千代田キャンパス 601 教室

出席：赤嶺淳、矢吹康夫、上田貴子、石川良子、今野日出晴、佐野直子、塚田守、根本雅也、橋本みゆき、小林多寿子、能川泰治、山本恵里子、野入直美、佐藤量

欠席：安岡健一

1. 前回議事録・議事録記載者確認

出席理事により前回議事録を確認、承認された。

2. 会長から

赤嶺会長より挨拶。

3. 編集委員会報告

石川編集委員長より、理事会に先立って行われた編集委員会の報告がなされた。今期の編集委員会では、ジャーナルの質を高めることを目標に、活発に活動を行なっていく旨が話された。具体的には、執筆要項の改訂や学会誌の中により自由度の高いセクションを設けるといったアイデアが出された。また次号の特集は2019年春に行われたシンポジウムと大会シンポジウムの関連性が高いことから、連動した特集を組むことも話された。また、現在執筆要項と投稿規定が存在していることから、それらの整合性や中身について精査していくことなどが伝えられた。

なお、特集論文は1万6000～1万8000字であることが指摘された。

4. 研究活動委員会報告

■ 活動のスケジュールおよび大まかな内容について

橋本研究活動委員長より、今期2年間の研究活動委員会の活動のスケジュールが共有された。一年目は、2020年3月に「作品と現地をつなぐ」実践ワークショップ、5～6月ごろにシンポジウム、9月に大

会およびその関連企画がなされるとのことであった。3月の実践ワークショップは、前回の研究活動委員会でも話題となった千葉県旭市飯岡を対象としたフィールドワークが有力な案として出された。春のシンポジウムは「戦争体験をめぐる二次証言の可能性」を大きなテーマとして能川委員を中心に企画する。大会では開催校によるシンポジウム企画があることから、研究実践交流会を、「身近なオーラル・ヒストリー:「教育のため」や「声なき声を記録に残すため」の利用法」というテーマで山本委員を中心に行う。

矢吹事務局長より、ワークショップとシンポジウムの時期が、総会で承認された事業計画から入れ替えられていることに問題はないかと問われたが、順番の入れ替えにとどまるということから他の理事に了承された。

二年目は、2021年3月に小林委員を中心としたシンポジウム企画、5月に実践ワークショップ、9月に大会企画がなされるとのことであった。シンポジウム企画は「オーラルヒストリーヘリテージ」を大きなテーマとして、JOHAが始まる前のオーラルヒストリー研究のあり方を探ろうとするものであり、大会シンポジウムでも良いのではないかという意見も出された。9月の大会企画としては、安岡委員を中心にオーラルヒストリーと教育に関連した企画案が出されている。2年目については、1年目様子をみて改めて日程・企画を詰める。

■ 編集委員会との共同企画について

橋本研究活動委員長より、編集委員会との共同企画という提案が寄せられておりその可能性について提起がなされた。石川編集委員長より学会全体の質を上げるという意識を共有することで自然に連動していくのではないかという意見が出された。

■ 会員による持ち込み企画について

会員の持ち込み企画への学会としての対応について話し合われた。現在、研究大会の自由論題をグループで申し込むおよびテーマセッション以外には吸い上げる仕組みがないという指摘が出された。

■ JOHAの国際化について

山本・根本理事を中心にJOHAの国際化についての問題提起がなされた。山本理事、根本理事が2020年6月にシンガポールで行われるIOHAの大会に参加することから、現地で何ができるのかとともに、JOHAの将来的な国際化についての意見が出された。また、山本理事より、JOHAが始まった頃にはIOHAを含む海外の組織との連携が強かったことも併せて指摘された。

赤嶺会長より、JOHAの次の20年を考える中で、何が優先課題かを考えたときに、国際化があるのではないかと意見が出された。また、現在空席となっている理事のポストを国際担当とするのはどうかという意見も出た。しかし、ポストを設置すると継続性が求められるため、慎重に進めるべきだという意見が出た。

この件については継続審議されることとなったが、IOHAをはじめ今後に向けて、簡単な英語のフライヤーを作成することが了承された。

5. 広報委員会報告

野入広報委員長より、次号のニュースレターの内容について共有された。

6. 会計報告

上田会計より 2019 年度大会の会計報告がなされた。また、インターブックスが在庫管理業務を引き受けられなくなり代替業者を検討したが、学会誌の在庫管理の費用がかかることから、会計と編集委員会で折半して管理することが報告された。

7. 事務局報告

矢吹事務局長より名誉会員、賛助会員の制度について発議され、検討された。今後事務局で原案を作成し、審議することとなった。

また矢吹事務局長により会員名簿を作成するかどうかについて問題提起された。現在は会計が名簿を持っているが、会計に必要な情報のみのため、事務局用の名簿を別途作成することとなった。

入会申込書が現在 PDF 版しかないため、ワード版も作成することが確認された。

8. その他

2020 年度大会校の佐藤理事より現時点の大会概要が共有された。2020 年度は、9 月 5、6 日に立命館大学朱雀キャンパスで実施する方向で進めること、また実際の教室予約が 4 月のため、それに併せて報告募集をかけること、託児サービスを実施すること、大会校としてシンポジウムが企画されていること等が確認された。

なお、大会プレ企画についての質問が出たが、取り組みたい方がいればその方を中心に進めることが確認された。

次回理事会

日程：2020 年 6 月 7 or 14 日（日）13：00～

場所：未定

IV. お知らせ

1. オーラル・ヒストリー実践ワークショップ「現地と作品を結ぶ」

『語り継ぐ いいおか津波』の現場を歩く

『語り継ぐいいおか津波——被災者聞き取り調査記録集』（2013年、改訂版）や「復興かわら版」（最新号は54号）を発行してきた地元NPOの方の案内で東日本大震災9年後の被災地を歩くとともに、地道に続けてこられた聞き書き・発信活動について話をうかがいます。

【日時】2020年3月26日（木）午後

午前10時30分東京駅八重洲口前発（または10:10浜松町発）の京成バスに乗り「飯岡」へ。または12時半頃に現地集合（カントリーハウス海辺里 <http://tuberi.jp/>）

【場所】千葉県旭市飯岡地域

【対象】オーラルヒストリーの作品化や災害・地域づくりに関心ある人若干名～20人

【参加費】JOHA会員500円（学生他も同額）、非会員1000円

詳細は後日、JOHA会員メーリングリストおよび学会HPにてお知らせします。

2. シンポジウム「戦争体験に関する二次証言の可能性」（仮）

2020年5～6月頃の開催を見込んで交渉中です。詳細は後日、JOHA会員メーリングリストおよび学会HPにてお知らせします。

3. 国際オーラル・ヒストリー学会（IOHA）シンガポール大会

世界のオーラル・ヒストリー研究者・実践者が参加する国際オーラル・ヒストリー学会は各年に大会を開きます。2020年6月はアジアで初めてとなる、シンガポールでの開催です。IOHAの会員にならなくても、非メンバーとして大会に参加できます。参加申し込みが1月から始まり、早期申込には割引が適用されます。世界の研究者たちと交流するよい機会です。JOHA会員で発表する人も数人いますので、他にも日本から多くの方が参加されることを願います。

【日時】2020年6月22～26日

【場所】Singapore National Library（シンガポール国立図書館）

【ホスト】National Archives of Singapore（シンガポール国立アーカイブス）

【参加費】一般非会員SGD330～ 学生や会員は割引（詳細は <https://www.ioha2020.sg/registration/>）

新たな情報や詳細は後日JOHA会員メーリングリストおよび学会HPにてお知らせします。

（大会HPは <https://www.ioha2020.sg/> IOHAのHPは <https://www.ioha.org/>）

4. 『日本オーラル・ヒストリー研究』 第16号 原稿募集

論文、研究ノート、聞き書き資料、書評、書籍紹介の原稿を募集いたします。投稿希望者は[投稿規定・執筆要領](#)を参照の上、以下の編集委員会メールアドレスまで原稿をご送付ください。図版の著作権をはじめ、図版の文字換算など、12号以降は執筆要領の変更が多々あります。また、こちらの記事にリンクを貼っているものが最新版になりますので、ご注意ください。

○ 提出原稿は、査読審査を経たのち、6月中旬ごろに掲載の可否が決定します。

○ 12号より原稿の提出は、メール添付で受け付けることとなりました。以下のアドレスにご送付ください。学会大会で発表されたみなさんをはじめ、会員のみならず会員のみなさまからの投稿をお待ちしています。投稿に関し、質問があれば、お気軽に以下の問い合わせ先にお訊ねください。

○ 募集期間：2020年3月20日（金）～31日（火）

※~~※~~切厳守は従来通りですが、メールによる事故を防ぐため、募集期間を設けます。ご協力ください。

○ 問合せ・応募原稿送付先：joha_journal(at)ml.rikkyo.ac.jp

（(at)部分を@に替えて送信してください。）

なお、『日本オーラル・ヒストリー研究』では、規定字数を一般的な学会誌よりも多い28,000字としております。これは語り・口述史資料を十分に扱えるようにするためです。ところが、推敲が不十分なため内容を絞り切れておらず、いたずらに長くなっているだけのように見受けられる投稿論文があります。規定字数の本来の趣旨を改めてご確認いただいたうえで執筆をお願いいたします。また、論文の形式には収まらない様々な論稿（現場からの報告、聞き書き資料の紹介、調査教育実践の報告など）も募集しております。今期編集委員会では、学術論文のみならず幅広く成果を発表できる場になるよう投稿規定の改訂も検討してまいります。ふるってご応募ください。

編集委員長 石川良子

『日本オーラル・ヒストリー研究』投稿規定

① 投稿は会員に限ります。まだ会員でない方は、投稿の際、入会の手続きをおとりください。

② 投稿原稿は原則として日本語か英語によるものとします。

③ 投稿は下記のカテゴリーで未発表のものとし、それぞれ規定の文字数で執筆してください。

なお、表題、英文要旨、見出し、図表、注、文献リスト等も文字数に含まれます。

- ・論文 28,000 字以内
- ・研究ノート 18,000 字以内
- ・聞き書き資料 18,000 字以内
- ・書評論文 18,000 字以内
- ・図書紹介 2,000 字以内 ※会員の自著紹介を歓迎します。また、非会員の著書も歓迎します。
(英語論文に関しては執筆要綱を確認、その他は編集委員会に確認してください。)

- ④ このほか研究動向(回顧と展望)、資料紹介、海外の研究動向、実践報告など、編集委員会が適当と判断したものも、受け付けます。文字数は、編集委員会に相談ください。
- ⑤ 英文要旨は200語未満とします。英文の表題と要旨については、希望者には掲載決定後に編集委員会を通じ、校閲作業を依頼します。ただし、この作業にかかる費用は投稿者の自己負担とします。
- ⑥ 原稿は、執筆要領にしたがって、MS Wordによる横書きとします。審査用の原稿は、Wordファイルおよびpdfファイル両方のデータを下記の編集委員会のメールアドレスまで電子メールに添付して送付ください。原稿のファイル名は「投稿の日付け_投稿者氏名(ローマ字表記)」とします。
例) 20180331_johataro.doc
- ⑦ 投稿者は別ファイルに、氏名、郵便番号と住所・電話番号、メールアドレス、所属機関と電話番号、投稿の 카테고리を明記し、電子メールに添付してください。ファイル名は「投稿者」の氏名(ローマ字表記)とします。
例) johataro.doc
- ⑧ 投稿原稿は原則として査読審査を経て、編集委員会が掲載の可否を決定します。
- ⑨ 本誌に掲載された著作物の著作権は、日本オーラル・ヒストリー学会に帰属します。
- ⑩ 当該論文の抜刷は、別途、有料にて制作可能です。ただし、50部単位とし、抜刷の希望者は、初校返送時に編集委員会に申し出てください。

原稿送付先： 日本オーラル・ヒストリー学会編集委員会
joha_journal@ml.rikkyo.ac.jp

日本オーラル・ヒストリー学会編集委員会
石川良子、今野日出晴、佐野直子、塚田守、根本雅也(五十音順)

5. 会員異動(2019年6月16日～12月15日)

(1)新入会員(入会順)

能川泰治 金沢大学
土肥いつき 大阪府立大学博士後期課程
山崎かつら
新庄洸 早稲田大学大学院教育学研究科修士課程
西尾留美子

田沼幸子 首都大学東京
長谷川充子 長崎大学大学院医歯薬学総合研究科博士課程
山内俊久 創価大学教育学部児童教育学科
山本真知子 同志社大学大学院グローバルスタディーズ研究科博士後期課程

(2)退会

藤川杏奈、広谷鏡子

*連絡先（住所・電話番号・E-mail アドレス）を変更された場合は、できるだけ速やかに事務局までご連絡ください。

（事務局長 矢吹康夫）

6. 2019年度（2019年4月1日～2020年3月31日）会費納入のお願い

平素は、学会運営へのご協力をありがとうございます。本学会は会員のみなさまの会費で成り立っております。今年度の会費が未納の方におかれましては、ご入金のほどよろしくお願ひいたします。

また、一部ですが2018年度分、2017年度分についても未納の会員さまがいらっしゃいます。こちらも早めのご納入をよろしくお願ひいたします。

■年会費

一般会員：5000円 学生・その他会員：3000円

*「学生・その他会員」の「その他」には、年収200万円以内の方が該当します。区分を変更される場合は、会費納入時に払込票等にその旨明記してください。

*年会費には学会誌代が含まれています。

■ゆうちょ銀行からの振込先

口座名：日本オーラル・ヒストリー学会

口座番号：00150-6-353335

*払込取扱票(ゆうちょ銀行の青色の振込用紙)の通信欄には住所・氏名を忘れずにご記入ください。

*従来の記号・番号は変わりありません。

■ゆうちょ銀行以外の金融機関から振り込む際の口座情報

銀行名：ゆうちょ銀行

金融機関コード：9900

店番：019

店名（カナ）：〇一九店（ゼロイチキュウ店）

預金種目：当座

口座番号：0353335

カナ氏名：(受取人名)：ニホンオーラルヒストリーガツカイ

郵便払込・口座振込の控えで領収書に代えさせていただきますので、控えは必ず保管してください。必要に応じて、個別に領収書も発行させていただいておりますので、その際にご連絡下さい。その他、学会会計全般についてご質問等ございましたら、会計担当の上田(uedanota(at)kindai.ac.jp)までお問い合わせください。

(会計 上田貴子)

.....

.....

日本オーラル・ヒストリー学会

Japan Oral History Association (JOHA)

JOHAニューズレター第37号

2020年1月15日

編集発行：日本オーラル・ヒストリー学会

JOHA 事務局

〒171-8501 東京都豊島区西池袋3-34-1

立教大学社会学部矢吹康夫宛

日本オーラル・ヒストリー学会事務局

E-mail joha.secretariat(at)ml.rikkyo.ac.jp

* 郵送またはメールでのご連絡をお願いいたします。
